

適正規模・適正配置による学習指導上の効果と課題

資料 5

資料作成上の留意点

- ① 学級数による学習指導に関する影響
- ② 単学級の児童生徒数による学習指導に関する影響

以上の留意点を踏まえ資料を作成しています。

(1) 学級数・児童生徒数に関する視点

1学年の学級数等		学習指導		児童生徒同士の関係、又は児童生徒と先生の関係		教職員	
		効果	課題	効果	課題	効果	課題
複数学級	25人程度	同じ学年のクラス同士が切磋琢磨する教育活動ができる。 (球技大会など)		①クラス替えを契機に、新たな人間関係を構築する力を身に付けることができる。 ②児童生徒の人間関係や教員との人間関係に配慮した学級編成ができる。		教職員の勤務年数にかかわらず、行事や授業について同一学年の担当で協議・共有することができ、指導技術の相互伝達が行いやすい。	
単学級	25人程度	学級内では、授業において一斉指導・グループ学習・ペア学習などの、学習形態で学習することができる。	クラス同士が切磋琢磨する教育活動ができない。	①学級内の児童生徒の人間関係がより深まりやすい。 ②異年齢上級生や下級生との人間関係の構築がよりできる。 ③下級生の面倒をみる気持ちがより強く芽生える。	①クラス替えができない。 ②児童生徒の人間関係や教員との人間関係に配慮した学級編成ができない。 ③児童生徒の人間関係や相互の評価が固定化しやすい。 ④男女比に偏りが生じやすい。	異年齢の担当者と相談することで(低・中・高など)、より学習の見通しを持つことができる。	①教科専科など、専門性を生かした教員の配置が難しい。 ②教職員同士が切磋琢磨する環境が作りにくく、指導技術の相互伝達が難しい(学年会・教科会ができない)。 ①免許外指導の教科の可能性ある【中】※1 ②部活動の指導者確保が困難となる【中】※1
	10人未満	①一人ひとりの学習状況や学習内容の定着状況を的確に把握でき、補充指導や個別指導を含めたよりきめ細やかな指導が行いやすい。 ②意見を発表できる機会が多くなる。	①児童生徒から多様な発言が引き出しにくく、授業展開に制約が生じる(教科等が得意な子どもの考えに学級全体が引っ張られがちとなる)。 ②複式学級では、間接指導時に児童が相互に学び合う活動の進め方を理解し身に付けなければならない。※2 ③各学年の児童生徒数により、複式が解消することがあるため、年度により複式・単学級と指導方法が変わる可能性がある。				①複式学級の指導という特別な指導技術が求められる。 ②複数学年分の教材研究・指導準備を行うことになり、負担が大きい。
複式学級	2学年合計16人以下	教師が複数の学年間を行き来する間、児童生徒が相互に学び合う活動を行うことができる。					

※1 【中】は中学校での事例を示す。

※2 複式学級では、「直接指導」教師と子どもが直接関わりながら進める指導と、「間接指導」一方の学年に教師が直接指導しているとき、学習の進め方を理解させ子どもが学習を進めること。